母子相互作用の臨床応用に関する研究

原　ひろ子(お茶の水大学家政学部)

子どもの成長をめぐり、親および保育者の関わり方にも社会文化の変化に即した対応が迫られている。そこで、当研究班では以下の二研究を同時進行させてきた。

A)狩猟採集民社会における育児法の比較研究

小規模で人口密度が低く、社会組織や経済制度などの単純な狩猟採集民社会において、子どもたちはどのように自立に向けて社会化されているのだろうか。比較的詳細な民族誌資料および社会化に関する情報の得られる三つの社会―カラハリ砂漠のブッシュマン、コンゴー熱帯降雨林のムブティ・ピグミー、カナダのタイガ地帯に住むヘアー・インディアン―をとりあげて比較考察した。資料は国内の図書館その他で入手できる文献資料ならびに当該社会での実地調査経験者へのインタビューなどに基づくものである。三社会を比較することにより、共通の特徴も見出せたが、差異も顕著で、各々の社会における子どもの自立への過程はその社会の生態学的、社会文化的条件と密接な関連を有することが明らかになった。

三社会における社会化過程の類同を以下の諸点でまとめた。

1)乳児期の子どもと母親との密着した関係がブッシュマンとピグミー社会に見られる。ヘアー族の子どもはそれに対して、乳児期より母親以外の、父親、オバ、祖母などの大人の育児参加が極めて顕著で、必ずしも母子密着とはいえない。しかし、三社会に共通していることは、母子ないし父子等の乳児をとりまく狭い範囲の人間関係が閉塞的ではなく、常に共同全体の人間関係の網の目の中で母親ないし主たる養育者によって充分に愛情を注がれ、ケアを受けて育つのがこれらの社会の乳児期の特徴である。

2)母親ないし主たる養育者から身体的に自立し基本的生活習慣を習得する時期は、ヘアー族においては非常に早いが、ブッシュマンとピグミーにおいては次子誕生がきっかけとなる(次子とは3、4歳あるいはそれ以上の年齢差あり)。そして、ピグミーの子どもは弟妹の誕生と同時に子ども集団に追いやられ、急激に母親から身体的自立が強要されるのに対して、ブッシュマンの場合は子どもの気持に逆らうことなく非常に緩慢に母親への愛着を子ども集団へのそれへと向けて行く。

3)三つの社会に共通して、社会化過程において従順さのしつけはみられず、専ら自主性が強調される。子どもは年齢に応じて行動規範がほぼ定められており、その範囲ならば何の制限も拘束もなく自由な行動が許される。それは放任とも異なり、常に共同体の大人―親とは限らない―の誰かが子どもたちに危険のないように見守っている。大人が見守る中で子どもたちは最大限の自由を得ているのである。ピグミーとヘアー族ではかなり早期から、自由さの中にも、共同体に対する責任が強調され、行動の自律が要求されるが、ブッシュマンにあっては子どもの行動に対する制止、禁止も叱責もほとんどない。

4)子どもの遊びの主要部分は三社会とも共通してその社会の大人の生業あるいは日常活動の模倣遊びである。大人の生産用具や生活道具のミニチュアを与えられ、それを持って遊んでいる間に、いつの間にかそれがお手伝いとなり、やがて一人前の労働になっていく。遊びと労働との間に連続性がみられるわけである。また、ピグミーの生産方式は集団狩猟であり、子ども

の遊びにもそれが反映されて集団ゲームが遊びの重要な形態となっている。一方、ブッシュマンは個人狩猟を基本的生産方式としており、ブッシュマンの子どもはまた闘争や競争を嫌う。それが子どもの遊びにも反映し、競争的遊びを行わない。このように、各々の社会の生業形態、価値観等が子どもの遊び方やその内容に大きく影響を与えている。

5)権力や権威の集中化がみられない小規模社会であるが故に、秩序維持のために人間関係調整のメカニズムが肝要である。ピグミーは攻撃性を日常的に発散させうる行動様式をもち(小屋の入口の向きを変える、丸太をもって喧嘩をするなど)、深刻な集団分裂に至るのを防いでいる。ピグミーは多くの労働力を要する集団猟をしているため、集団の分裂は致命的なのである。一方、ブッシュマンとヘアー族においては、平常な攻撃性は抑圧し、特定の親族間に認められる冗談関係や呪術を通して攻撃欲求を発散させることを子どものうちから学ぶが、うっ積した緊張や葛藤はしばしば集団の分裂をひきおこす。これらの社会では個人猟を基本とするので、集団の分裂も集団から個人が離れることも命とりにはならないのである。

6)経済的自立に関してみると、ピグミーとヘアー族の子どもは早期に一人前あるいは一人前に近い労働が期待され実行されるのに対し、ブッシュマン社会では、10代の半ばすぎまでお手伝い行動すら期待されない。亜極北の厳しい自然環境、資源状況のもとに生活するヘアー族の子どもが早期から一人前の労働が期待されるのは当然のこととして、自然資源に恵まれた他の二つの社会で何故このような差異が生じているのか。　ピグミーの労働の中心は狩猟であり、彼らの食料の約半分を占める植物性食料は、千数百年にわたって共存関係にあるバンツー系農耕民から獣肉と交換して得られる農作物に依存している。彼らの行う集団猟は多くの労働力を必要とし、ほぼ10歳以上の子どもまで動員しなければならない。子ども勢子として重要な働き手なのである。一方、ブッシュマンの狩猟は(20m位しか飛ばない弓矢を使っているため)、見通しの良いオープンランドで獲物に感づかれないようにして至近に迫り動物を捕獲するという相当高度の技術と習練を要する。従って、一人前の狩人になるのは年齢的にもかなり高くなる。ところが、彼らは、このあまり成果の安定しない狩猟に二、三割方しか依存せず、もっぱら女子の行う、成果の確実な採集による植物性食料に依存している。彼らは少ない労働時間で充分な植物性食料を得、子どもの労働をあてにすることなく、しかもゆとりのある生活をしているというわけである。

B)幼児の生活行動とテレビ視聴行動

本研究では、幼児が個々の家庭環境の中でどのようなテレビ視聴行動をとり、それが時を経て、どのように変化していくかを追跡した。幼児の生活行動とテレビ視聴行動を、参与観察および母親自身による記録、母親へのインタビュー等を通し、詳細に把握した。その結果、4名の調査対象児(A男、B子、C子、D子)のうち、ひとりっ子であるA男のテレビ依存の度合がもっとも高いことが明らかになった。一日の平均視聴時間が長いのはもちろん、注視時間も長く、生活全体に占めるテレビの比重はきわめて高い。一方、兄や姉のいるB子、C子、D子はチャンネル権がないため大抵は、兄や姉の好きな番組を見ることになる。そのせいかテレビを独占できる幼児番組以外は真剣に見ることも少なく、むしろ、テレビを見ている兄や姉の行動に関心を示すことが多い。また、視聴時間や視聴番組について規制をうけているD子は、どの調査対象時点でも4名のうちもっとも平均視聴行動が短く、テレビ依存の度合も低い。ところが、そのD子も、兄がいず、友だちとも遊べず、母親も遊び相手になってやれない日には視聴時間が長くなる。

たしかに、テレビ依存度の強いA男の生活行動とテレビ視聴行動との関連をみてみても、一日の生活行動のうち、自宅でのひとり遊びの占

める比率の高い日にテレビをよく見ていることが明らかになった。父親が在宅する日、友だちと遊んだ日、母親と外出した日は視聴時間が短く、母親にテレビを催促することも少ない。

以上のことからは対人関係の貧弱さが子どもをテレビに向かわせると仮定できる。

それでは、対人関係の密疎とテレビ視聴行動との関連を時系列でみるとどうだろうか。テレビ依存度の強いA男の場合をみてみることにしよう。

図1に示すように、A男は乳児期にテレビの接触がない。これは母親がテレビを見るのが好きでなかったためである。ところが、そのA男も友だちと遊びはじめるようになるにつれ、テレビと接触をもたないわけにはいかなくなる。

見はじめて3〜4ヶ月経た頃(2歳9ヶ月)から数ヶ月間、A男は戦闘シーンの多い特撮番組に夢中になってしまう。主人公の変身ポーズを模倣し、敵役が登場すると画面をぶつ、等々の反応を示すばかりでなく、テレビを見ていない時でもカセットに録音したテーマソングを繰り返し聞き、主人公の変身ポーズや戦闘シーンをひとりで演じたりする。この時期、A男はとくに情動的覚醒を生みやすいシーンや番組を好んで見ていた。

そこで、この時期の対人関係を見てみると(図1の3〜4)、母子関係はきわめて濃密であるが、父子関係は疎遠、友人関係はまだ充分に形成されていないという状態である。日常生活で何事も母親に依存的なだけではなく、テレビを見ていても恐いシーンの時は母親の側にやって来たり、好きな登場人物が出てくるシーンは母親を呼びに来たりする。テレビを通して味わう喜怒哀楽の感情をできるだけ母親と共有しようとするのである。

母親とはこのような関係をもっているA男も父親にはあまりなじまず、父親の休日にはなるべく離れるようにしており、たまに父親がA男を抱こうとしても泣いて逃げてしまうというような状態であった。これは、母親の説明によれば、初めての子どもであるあるため、父親は子どもにどのように接していいかわからず、自分から子どもの相手になることが少ないため、A男の方もなかなか父親にはなじまないということであった。

このように、母親との関係だけが濃密で、それ以外の関係が貧弱なこの時期、A男のテレビ依存度は強く、さまざまな欲求をテレビを通して充足させている。たとえば、気持ちが、苛立っている時もテレビをつけると機嫌がよくなるというようなことはしばしば観察された。テレビが情動的覚醒を生みだす一方で、情緒的安定作用も果たしているのである。

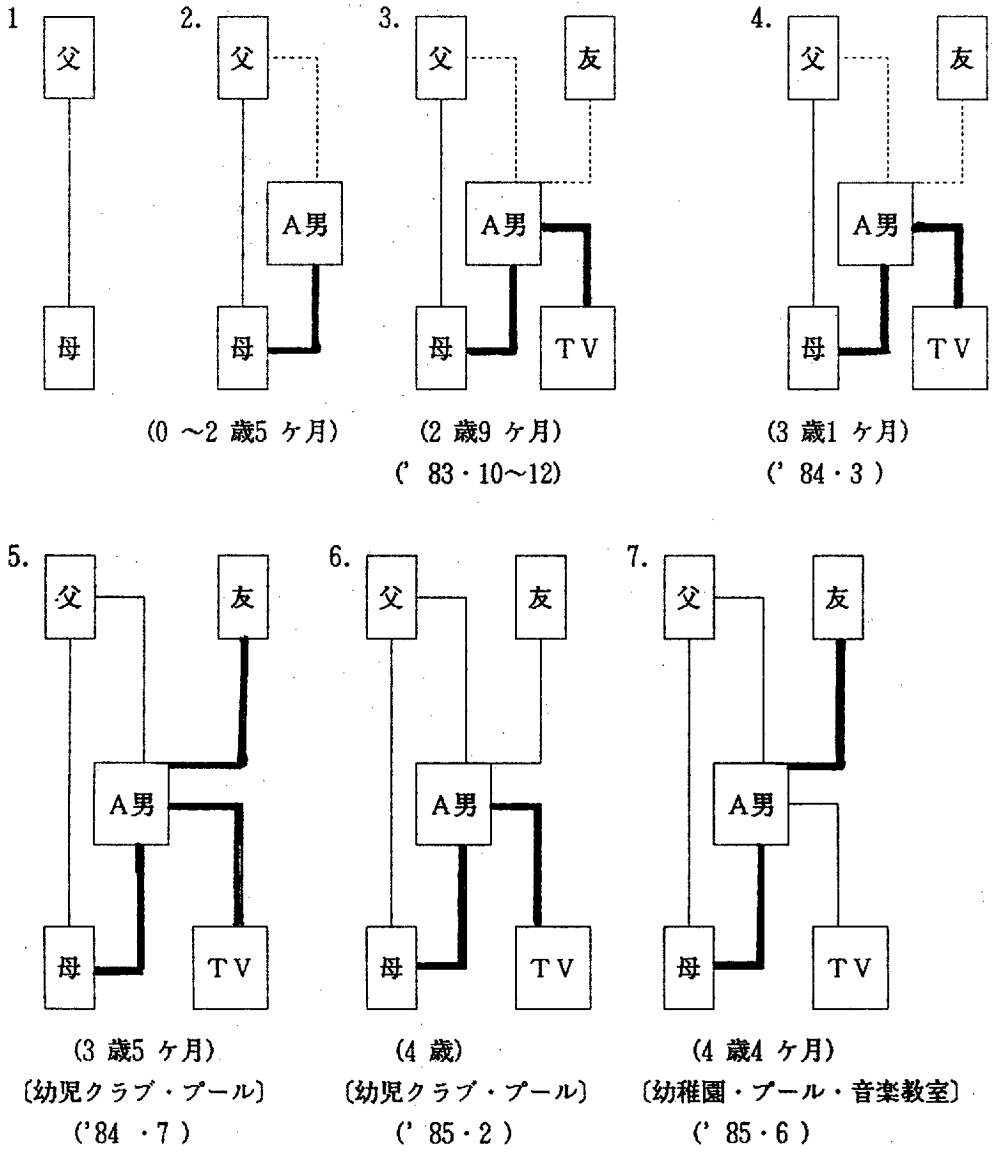
さて、このようなA男も、何事に対しても受容的な態度で臨む母親との関係を基盤に、時がたつにつれ、対人関係にもすこしずつ変化がうまれる。母親を媒介に父親との関係も次第に円滑になり、父親の休日には自分の方から話しかけるようにもなる。また、仲の良い友だちもでき、友人関係も緊密になっていく。このように、母子関係ばかりではなく、父子関係や友人関係も形成されるようになると、A男のテレビ依存度も弱くなり、好んで見る番組も、戦闘シーンの多い番組よりもむしろ、幼児向けの情報番組や穏やかなシーンの多いアニメ番組などに変わっていくことが観察された。

幼児の視聴反応を対人関係とのかかわりのもとで縦断的に観察すると、対人関係が希薄な場合に、テレビが子どもに情動的覚醒作用を果たしたり、情緒的安定作用も果たしたりすることが見受けられた。また、そのような欲求が対人関係の中で充足されている場合はテレビは子どもにとって、なによりも情報欲求を充足させる装置として機能している。

家族は、母子関係、父子関係、兄弟姉妹関係を基盤として維持される一つのシステムであり、その関係は必ずしも固定的なものではなく、絶えず変化していることが観察されている。その家族関係の微妙な変化に対応した子どもの緊張感を解放する、いわば心理的安全弁としてテレビが機能していると考えられる。テレビは単な

る情報装置、娯楽装置ではなく、家族構成員の減少した現代の家族の中では、子どもの情緒を安定させる装置の一つとして重要な役割を果たしていることが推察されるのである。対人関係のどのような側面がテレビによって代替可能で、どのような側面が代替可能ではないか、などについては今後の研究課題にしたいと思う。

図1　A男の家族関係とテレビ依存度



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

子どもの成長をめぐり、親および保育者の関わり方にも社会文化の変化に即した対応が迫られている。そこで、当研究班では以下の二研究を同時進行させてきた。